



Title	相互行為にみる恣意的描き方とその背景 : 解説番組におけるモンゴル人女性の描写を通して
Author(s)	オユナー, ノミン
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 51-60
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/62105">https://doi.org/10.18910/62105</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

相互行為にみる恣意的描き方とその背景  
— 解説番組におけるモンゴル人女性の描写を通して —<sup>1</sup>

オユナー ノミン

## 1. はじめに

2015年12月28日に、インターネット上のチャンネル「チャンネルクララ」で「世界史のはじまり モンゴルを学ぼう」という番組の第10回「モンゴルはウーマノミクス女性が活躍する社会のお手本」が放送された。番組では、モンゴルは女性が活躍する「ウーマノミクス」社会であると紹介され、「モンゴルの現代社会では、女性が働くのは当たり前であり、社会における男女の社会的地位は平等なものである」との主張が終始一貫して強調され、賞賛された。その原因としてモンゴルの伝統的な生活様式の特徴や歴史的な事例が取り上げられた。

番組は YouTube といった誰もがアクセスすることができるネットメディアにアップロードされており、そのサイトにアクセスできる不特定多数の視聴者に送られているとはいえ、番組自体は日本語で解説され、そのタイトルも「世界史のはじまり モンゴルを学ぼう」となっていることから、想定する視聴者は主に日本人であることが推測される。

本稿では、モンゴル人女性が上記のようにとりあげられる原因を明らかにすることを目的とし、批判的談話分析の主張を念頭におきながら、主として談話に見られる言語的または非言語的な要素を手掛かりに分析・考察を行う。以下、分析対象となる番組について簡単に紹介した上で、分析の焦点とその理由について述べる。

## 2. 分析対象データおよび分析方法

本節では、チャンネルクララについて紹介し、分析・考察の対象とその理由について述べる。分析データは、2015年末に「チャンネルクララ」で放送された「世界史のはじまり モンゴルを学ぼう」番組の第10回「モンゴルはウーマノミクス女性が活躍する社会のお手本」での司会者とゲストの2人による13分のやりとりである。司会者はジャーナリストの桜林美佐、解説者であるゲストは歴史学者の宮脇淳子(東洋史・中央アジア専門)である。2人のやり取りの流れを以下に示す。

<話の流れ>

- 1) 日本在住のモンゴル出身力士とその妻：高卒男性と大卒女性が多い
- 2) モンゴルでは、一般的に妻の方が学歴が上である。日本人にはそのことが不思議
- 3) モンゴルで女性が高学歴にこだわるのは自立するため
- 4) モンゴル人の女性に関する伝統的な考え方について（歴史的事例）：  
結婚しても姓は変わらない、生まれた家の代表、自分の財産を持つ、モンゴルで女性が高学歴になるのは自立するため
- 5) モンゴルにおける伝統的な家庭内の役割分担の特徴：女性は馬に乗れる、女性は発言権が大きく権威を持つ

---

<sup>1</sup> 本稿は、第38回社会言語科学会研究大会において発表したものを大幅に修正・発展させたものである。

番組が放送される同チャンネルのウェブサイトに残された開局の挨拶(2013年)には、時の首相安倍晋三に対して強い肯定的スタンスを示す内容が掲載されていることから、チャンネルの政治的な立場は、当時そして2016年現在も続く現政権に近く、またそれは公のものであることが推測できる。本稿は、このように明確な政治スタンスを持ったメディアが今この時期、このような内容を放送する背景を考えることを目的としている。

この番組は、決められたトピックについて解説者が解説を行い、情報を提供する解説者とそれに対して番組の進行を担う司会者といった番組の仕組みゆえ、番組における2人の役はあらかじめ決められている。2人をエキスパートとノービズといった枠組みで考えたとき、司会者に比べて、モンゴル社会に関する情報を提供できる立場にいる専門家の解説者の方がエキスパートに当たることになるが、一方で2人は日本社会に関して持っている知識を共有できる者同士でもある。上記に述べたようにYouTubeを通して一般の視聴者向けに放送されるため、解説者は司会者だけではなく、番組を見る視聴者に向けて解説を行うよう正面に向き、司会者とは隣同士の位置から解説を行う。ところが、通常正面に向いたまま話をする解説者が場合によっては司会者に直接視線を向け、司会者に反応を求めるように相互行為を促す場面がしばしば見られる。本稿では、具体的に考察の対象とする点は2つある。

1. 解説者が特に司会者の方に視線を移行させて、相互行為を行う時はどのような時か(図1と2を参照)。
2. 解説者が解説および主張の根拠としてどのような事例と登場人物を取り上げ、その声を引用するのか。



1では、その場面においてどのような内容が前景化または後景化されているのかを問う。それらの場面は解説者による驚きや強調に値するものと判断された内容が語られる場面であると考えられるためである。2では、解説において取り上げられる事例と登場人物による声とその引用に注目する。番組で解説者が、モンゴル人女性が伝統的に男性と対等な立場にあり、活躍していることの根拠として取り上げる事例の多くは、王妃など貴族の女性たちの事例であり、それら貴族の女性たちに関して、程度の差があったにせよ、どの文化においても権力を持って当然な立場ではなかったかと考えられる。分析では、少ないながらも言及される一般の人の事例に焦点を当て、そこに見られる引用と声の妥当性を探る。

以下、分析の際に用いる引用と声、相互行為における非言語ジェスチャー視線などの概念について述べる。

### 3. 先行研究

#### 3.1 声と引用について

Bakhtin (1981,1986) は、あらゆるテキストの背景には、そのテキストを生み出すコンテキストが存在しており、それゆえ、どのようなテキストまたは発話であってもそこに相互対話の関係に在る複数の声混じり合っていることを主張し、対話性と声の多重性の概念を提唱した。Bakhtin のこの考えは、文学だけではなく言語学や教育学を始め多くの学問分野に応用されてきた。日本語の場合、例えば誰か他人が行った発話を自分の発話の中に取り入れる「間接話法の (reported speech) 際に「～と、～こと、～そう」などの引用表現がそのマーカーとして用いられる。分析対象番組の中で解説者が解説の裏付けとして、例えば「男の子は後回しだって」のように誰か他人が言った発話を間接的に引用して伝える場合もあれば、「喧嘩すると夫が俺は出ていくぞ」などのように誰かその場にいる人が言ったであろう声を再現するような形で直接的に引用し、解説を行ったものも少なくない。メイナード (1997) は、引用する者の声と引用される者の声の対話関係を探ることの重要性を指摘し、それによって、語り手が引用表現を選択した動機を理解することが可能になると述べた。Tannen (1989, 2007) は、引用について、引用はあくまでも引用する人が創作したものと考えるべきとし、引用 ‘reported speech’ を「創作話法」(constructed dialogue)と見ることができると示唆した。Wertsch (1991) も同じく引用表現を用いることによって、話し手が目的に合わせ、内容を構築すると述べた。

#### 3.2 相互行為における非言語コミュニケーション・視線について

相互行為によるコミュニケーションを考える際に、やりとりに見られる視線やジェスチャーなどの非言語的要素および「非言語モダリティの共起が必須」(片岡・池田・秦 2017)である。対人関係における話し手の視点には、キャラクターの視点を反映させるジェスチャー (character viewpoint) と観察者の視点を反映させる(observer viewpoint) があることが McNeill (1992)で主張された。坊農・片桐 (2005) は、それらの視点を「叙事的視点」(descriptive viewpoint) と位置付けた上で、相互行為での情報伝達を捉える上で、新たに「相互行為的視点」(interactive viewpoint) が必要であることを指摘した。坊農・片桐 (2005) によれば、「相互行為的視点」の特徴は、表現主体が志向し、ものごとを表現するのはその対象に加えて聞き手と見る点である。坊農・片桐 (2005) はさらに相互行為の中で話し手が相手に視線を向けるジェスチャーを「視線配布」と呼び、それには、「聞き手のうなずきを促す傾向がある」(p.11)と述べた。

会話の中で参加者たちが目を合わせる否か、どれだけアイコンタクトができるかといったことに座席の位置も影響する。本稿の対象番組では、隣同士に座る位置から、解説者が身体の上半身を司会者の方にひねり(body torque, Schegloff 1998) 視線を向けるジェスチャーがしばしば見られる。Schegloff (1998)は、身体をひねる動作について、動作者がある行動を中座し別の動作に移行するとともに、もとの動作に戻る準備であると指摘するのを考慮すれば、番組にみられる解説者の同じ身体動作は、正面に向き視聴者に解説を行うやり取りから、「身体ひねり」(body torque) によって司会者との相互行為に移行し、また視聴者の存在を意識した「解説の動作」に戻る動作といえる。

分析では、解説者が司会者の方に視線を向けるとともに上半身をひねる身体動作を「相手にうなずきを求める機能を持つ相互行為」とであると扱い、分析を進める。

#### 4. 分析と考察

##### 4.1 相互行為における強調または前景化

本節では、実際のやりとりの事例から、解説者(以下 G)がモンゴルと日本社会における女性についての考え方の違いをいかに強調し、前景化しているかを示す。以下に示すデータは、番組の冒頭で解説者が男性に比べてなぜモンゴル人女性の方が、学歴が高くて活発であるかを調べ始めたきっかけを司会者(以下 H)に語る場面である。

##### <抜粋 1>

58 G: (司会者に視線を向ける) ということで女が大学卒で男が[高卒というのも

59 H: [へええ:

60 G: 相撲とりだからそうなのと思ったら

61 実は(視線を向ける)他の人たちもそうだった

62 H: ごく一般的な(.)へええ:

63 G: それはそれはもう[驚きでしょう(視線を向ける)

64 H: [んんんなんかね初めて

65 知りますこういうの

66 G: んんん:びっくりなんですよそれで私も[調べ始めて

67 H: [はい

68 G: 本当にうんと貧しい家の子はモンゴル人はお金が

69 ある分モンゴル人は女の子から先に高等教育受けさせ

70 て男の子は後回しだって(視線を向ける)

まず、58行目でGはHの方に視線を向け、身体をHのねじりながら「女性の方が男性より学歴が高いこと」といった内容を提供し始める。それに対すしてHはそれまでに視聴者に向けられていた行為が視線配布や身体動作(坊農・片桐 2005)によって自分に向けられたものと瞬時に察し、59行目で即座に反応を返している。さらに、61行目では、GはHに視線を向けながら「他の人たちもそうだった」と述べると「ごく一般的な(.)」と「他の人たち」の言い換えを行い、Gとの会話の共同構築を行った上、さらに「へええ」(62行目)と再び驚きを示す。そして、3度目に視線を向けた63行目では、Gは「驚き」の後に文末表現「でしょう」を用いHに対する確認要求(内田 2002)を行っている。「でしょう」でマークされる確認の行為に対して、Hは「んんん なんかね初めて知りますこういうの」(64-65行目)と肯定かつ驚きを示して、返答している。

ここで行われていることは、情報提供者・専門家・エキスパートとしてのGの視線配布や身体動作に応じて、情報被提供者・ノービスであるHが適切に驚きを持って情報を受け止めた姿である。その情報とは本番組のコンテキストにおいては、「モンゴルでは女性の方が男性よりも学歴が上なのは当然である」という驚きの新情報であり、それはすなわち「女性より男性の方が学歴が上であって当然なこと」といった日本の規範意識を反映しているといえる。

次の、68 行目の最後で G は、「だって」を用いることによって、その前の内容は彼女によるものではなく、だれかに聞いた話し、他人による発話を彼女はこの場において引用し再現させたことになる。ただし、68 行目にある「本当にうんと貧しい家の子はモンゴル人はお金がある分モンゴル人は女の子から先に高等教育受けさせて男の子は後回しだって」の原点および元の主体はここでは不明なままである。全ての引用はあくまでも引用する者によって創作されたものと述べる Tannen (1989) を考えると、不特定の主体によるこの発話はもともとこの通り発話されたかどうかにも疑問の余地が生じる。Tannen に従えば、データに見られる引用される「声」および内容は解説者によって目的に合わせ、構築された内容とみることも可能である。

次に示す抜粋 2 は、モンゴル社会において、「女性の発言権が大きいこと」という内容がいかに強調されているかを示すやりとりである。ここでは G がモンゴル人女性の家庭内での権利や発言権について述べている。

#### <抜粋 2>

178 G: それであの女は発言権大きくて (.)

179 今でも遊牧民が喧嘩すると 夫が俺は出ていくぞ@ (視線を向ける)

180 H: あっ 出て行けじゃないってことですね

181 G: 家が女の[ものなんだから (視線を向ける)

182 H: [ああ:

183 G: でも 出て行かれると明日から遊牧に困るから

184 それは困るから 女は出て行かないでっていうんだけど (視線を向ける) (.)

185 それは[そういう[役割分担なんです

186 H: [ああ: [全然違うんですね本当は

まず注目するのは、モンゴル人女性の発言権に関する発話である。解説者の G は「女は発言権大きくて」(65 行目)、「非常に発言権強く」(93 行目)と繰り返し発話している。このように繰り返されることから、「女性の発言権が大きいこと」は、日本人にとっては意外なほど大きく、G にとって最も強調に値する重要な事項の一つであったと考えられる(Hsieh 2011)。「発言権が強い」との強調に対して、H は 186 行目で「ああ、全然違うんですね本当は」と発話し、話題に対する自身の評価を示す。抜粋 1 で見られたと同様に、今回も G は「喧嘩すると夫が俺は出ていくぞ」(179 行目)又は、「女は出て行かないでっていうんだけど」(184 行目)などと語り、その場にいるモンゴル人夫又はモンゴル人妻が言ったであろうと考えられる。

上記の抜粋では、このように発話を引用し、創作引用を行う様子がうかがえる。まとめると、G による創作引用の内容が H に受け入れられ(「全然違うんですね」)、モンゴル人女性が発言権が強く、家庭内での力関係では女性の方が上であるといった主張が 2 人によって前景化され構築される。

しかし一方で、178-186 行目に見られる夫婦間の力関係に関するエピソードでは異なる側面が垣間見える。それらの点について続く 4.2 節「相互行為における背景化」で詳しく述べる。

#### 4.2 相互行為における背景化の例

前節で見たように 178-182 行目で家庭内では女性の方が力を持っているということを解説するが、続く 183 行目では G が「出て行かれると明日から遊牧に困るから女は出て行かないでって

うんだけど、」と述べ、実は女性の立場ばかりが強いものでもないことを述べる。しかし次の瞬間、「それはそういう役割分担なんです」(185 行目)と突然敬体で言い切り、「遊牧に困る女」を後景化させて、男女の強さとは関係ないと矛盾を強く否定するさまが見られる。次に示す抜粋 3 は、抜粋 1 と 2 で見られたようにモンゴルを日本と対比し、その違いだけを前景化し共同構築を行う 2 人が、両者に見られる類似点を相互行為の中でいかに背景化するかが読み取れる例である。

### <抜粋 3>

160 G: で実は戦争の時だけは頑張らないといけないわけだから

161 H: はいはい

162 G: 家のことは全部女がするわけ

163 H: うん:

164 G: 女は家に所属して外に行かない (. ) 遠いところ行かない

165 H: はい

166 G: (視線を向ける) それで結局家は女のものになっちゃうわけよ

167 H: ああ:

168 G: 自分が全部やっているし

169 H: ああ

170 G: それで家のことは女に任せるし

171 H: はい

抜粋 3 を見るとわかるように、G による「家のことは全部女がするわけ」(162 行目)、「女は家に所属して外に行かない 遠いところ行かない」(164 行目)、「自分が全部やっているし」(168 行目)、「それで家のことは女に任せるし」(170 行目)などの発話に対して H は「はい」「うん」「ああ」などの相づちのみの反応をし、抜粋 1 と 2 で見られるうなずきや評価などを表す積極的な相互行為はやり取りに見られない。抜粋 3 で G が提供する「家のことは全部女がする」「家のことは女に任せる」などの内容がその通りだとすれば、伝統的にみて日本とモンゴルとでは事情があまり変わらないように見受けられる。この点を考慮すれば、似ている事情に対する共感または類似点を認める発話が H になされることも本来ならありえよう。しかし、これまでに行ってきた解説の内容および「モンゴルと日本は全然違う」又は「モンゴルは女性の方が強い」との主張を考えれば、抜粋 3 における H の反応は、番組の本筋から外れてはいけないという司会者として役割を果たした、当然の反応であるともいえる。最後に、分析データの抜粋 4 (228-238 行目)に行われたやりとりにおいて、伝統的にモンゴルでは王と王妃は同じ玉座に座る対等な立場であったことを前景化させる際に、そこに見られる一夫多妻という歴史的現実を後景化するさまを示す。

### <抜粋 4>

228 G: それで女は非常に発言権強くて (. ) 次の出ています

229 H: はいはい

230 G: これがさ前も見せたかもしれない

231 H: ええ

232 G: ええ: と右側に女の人婦人が座っているけど

- 233 H: 本当  
 234 G: 第一夫人[は (.)] (視線を向ける)  
 235 H: [はい  
 236 G: おんなじ玉座に座っている  
 237 H: ああ：対等な感じですね：  
 238 G: すごいよねこれ@ (視線を向ける)

232 行目から G は、写真を見せながら王の隣に座る王妃について、「第一夫人は (.)」(234 行目)「おんなじ玉座に座っている」と発話し、238 行目では「すごいよねこれ」とそれに対する評価を表す。237 行目で H は「ああ対等な感じですね」とうなずくさまを示す。ここまでのやりとりから、第一夫人の対等さが見て取れるが、その一方で、この発話からは当然、第二夫人、第三夫人の存在が想定される。しかし、同じ玉座に座る第一夫人の対等さだけが前景化され、第二夫人、第三夫人の存在はまったく問題視されず、一夫多妻という男尊女卑は後景化され再び女権の強さが前景化されるのである。

上記抜粋 1~4 の分析から以下のことが言える。「モンゴル社会においては女性の活躍の方が男性を上回っており、社会における男女の社会的位置は平等なものである」と主張し、その一貫性を保つために、番組参加者たちは、他者の声や創作引用(constructed dialogue)を用いながら、巧みな前景化と後景化のストラテジーでその主張を遂行している。

## 5. 考察

上記抜粋 1~4 の分析を通して番組参加者たちは、前景化と後景化のストラテジーを用いて「モンゴルは女性が活躍する『ウーマノミクス』社会である」ことを共同構築する様子を分析できた。では、「モンゴル人女性の活躍や社会進出」といった内容は、何故今、このような形でとりあげられ、主張されるのだろうか。

その原因として、近年、女性の社会進出を支援する立場を積極的に表明している政府(2016 年現在安部内閣)の政策が考えられる。日本再興戦略を実現させる経済政策アベノミクス「3本の矢」戦略には、「女性の活躍」が挙げられ、女性の社会進出支援および女性の働きやすい環境整備が進められている。2014 年から開催されている「すべての女性が輝く社会づくり本部」、 「一億総活躍社会」のプラン(2015 年)、2015 年 8 月に成立した「女性の職業生活の推進に関する法律」<sup>2</sup> など多くの取り組みがその表れである。



図3) 「すべての女性が輝く社会づくり推進室の看板を掛ける安部首相  
 (2014 年、首相官邸のホームページより)

<sup>2</sup>資料：厚生労働省「女性の職業生活における活躍の促進に関する法律の概要」

しかしながら、これらの政策の実現および活躍が進められる女性たちの実態はどうだろうか。2015年の厚生労働省雇用均等・児童家庭局職業家庭両立課「仕事と家庭の両立支援対策について」資料によると、約6割の女性が出産・育児により、退職している結果となっている(図4)。また、当省による「働く女性に関する対策の概況<sup>3</sup>」を見れば女性の労働力率は、いわゆるM字型カーブ<sup>4</sup>が描かれることや、女性の管理職比率も国際的にみて低い水準にあることが報告されている<sup>5</sup>。近年、女性の労働力率が上昇傾向にあり、出産・育児に関わりなく仕事を続けたいという女性の意識が高まっている一方で、現実には出産・育児を機に退職を選んでしまう女性の方が報告の通り多いのが現状である。つまり、女性の職業に対する思いと現実行動との間にはギャップが見られる。家事・育児に専任するため自発的に退職する以外に、女性が仕事を辞める理由として、「仕事と家の両立の困難さ」が挙げられる<sup>6</sup>ことから働く女性を取り巻く環境整備改善の必要性がうかがえる。政策として活躍を促す政策が推進される中、待機児童問題や出産後の仕事復帰の困難さ、両立に対する職場および周りの雰囲気、女性に対する各種のハラスメントや介護問題など依然として諸問題を抱えながら働き続ける、又は、育児・介護を行う女性たちがいるのが現状といえる。

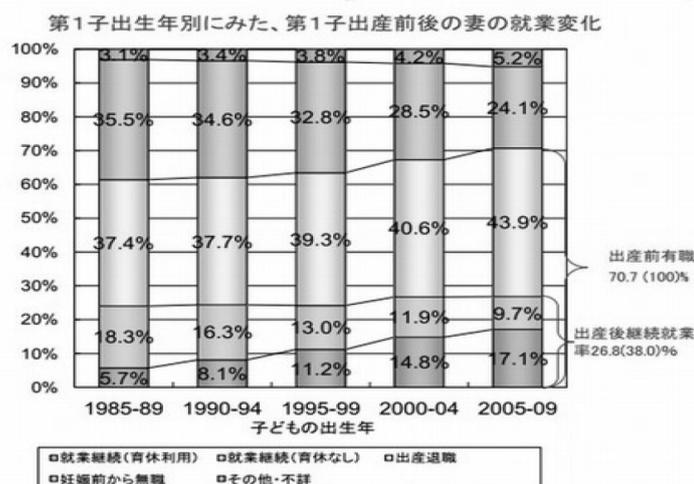


図4) 「第1子出生年別にみた、第1子出産前後の妻の就業変化」資料：厚生労働省雇用均等・児童家庭局職業家庭両立課、仕事と家庭の両立支援対策について

だが、当該番組では、現代日本社会はモンゴルと対比されるものの、上記の課題や女性が抱える困難点について言及されることがなかった。政治的なスタンスが現政権(2016年現在)と近いと推測できるチャンネルがこのようにして、モンゴルを事例に女性活躍を推奨する内容を放送する背景には、現在の日本社会における少子高齢化に伴う労働人口不足および外国人労働者の移民受

<sup>3</sup>資料：厚生労働省(2016)「働く女性に関する対策の概況」

<sup>4</sup>女性の労働力率は、結婚・出産期に当たる時期(30代)に一旦低下し、育児が一段落した時期に再び上昇する傾向が描かれる現象のこと(内閣府男女共同画局のホームページより)

<sup>5</sup>資料：厚生労働省(2016)「働く女性に関する対策の概況」

<sup>6</sup>資料：厚生労働省雇用均等・児童家庭局職業家庭両立課(2015)「仕事と家庭の両立支援対策について」

け入れの問題と女性の社会進出を促進し、女性が持っている能力や知恵を活用しようとする現政権の政策を支持する姿勢ではないかと考えられる。

番組で紹介された通りモンゴルは、確かに、女性が活躍する社会の手本とみられる側面があるが、一方で、男性の活躍が遅れている面もある。現代のモンゴル社会において男女間の学歴や収入に格差が見られるため、女性の方が男性より活躍しているように見られる側面があるが、モンゴルは他のアジア他国と変わることなく一夫多妻の伝統を持つ(抜粋 4)、男性主権社会でもある。

槇村(2002)は、モンゴルが1990年に市場経済への移行後、労働市場において男女の地位が崩壊したと指摘し、男性の失業率増加、女性世帯主が増加、女性の抱える負担が増加、女性への暴力の問題、高学歴を持つ女性の結婚問題等、市場経済への移行に伴う諸現象を指摘したのもある。

当該番組ではそういった面を後景化させ、モンゴル人女性の社会進出だけを強調し、視聴者に伝えていたことはデータ分析から明らかである。ただし、一方で前景化または後景化といった指摘の点はともかく活躍が強調されるモンゴル人女性との比較でみえてくるのは、社会進出や活躍が期待されつつある日本人女性像であることは察しがつく。

## 6. 結論

今回の分析を通して、明確な政治的立場を持つメディアが目的を達成し、伝えたいメッセージを伝える際に、強調や引用、または後景化させるストラテジーを積極的に用いることが明らかになった。

番組で紹介された通りモンゴルは、女性が活躍する社会の手本とみられる側面があるが、国会議員に占める女性の比率は全議員の15%にも満たない<sup>7</sup>ことからわかるように、日本や他のアジア諸国とさほど変わることのない男性主権社会でもある。しかし、当該番組ではそういった面を後景化させ、モンゴル人女性の社会進出だけを強調し、視聴者に伝えていたことはデータ分析から明確である。政治的スタンスが明らかな番組の場合予測が付きやすいが、それ以外でも我々はメディアに接する時、後景化された意味に機敏であるべきだろう。

## 参考文献

- Bakhtin, M. Mikhail (1981). Discourse in the novel. In *The dialogic imagination*, pp.259-422. (Translated by Emerson, Caryl, & Holquist, Michael) Austin: University of Texas Press.
- Bakhtin, M. Michael (1986). The problem of speech genres (V. McGee, Trans.). In C. Emerson & M. Holquist (Eds.), *Speech Genres and other late essays* (pp. 60-102). Austin: Univ. of Texas Press.
- 坊農真弓・片桐恭弘(2005). 「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点：ジェスチャー・視線・発話の協調」 『社会言語科学』 7(2) pp.3-13 社会言語科学会.
- Hsieh, Fuhui (2011). Repetition in social interaction: A case study on Mandarin conversations. *International Journal on Asian Language Processing*, 19(4): 153-168.
- 片岡邦好・池田佳子・秦かおり(2017). 「参与・関与の不均衡を考える」 片岡邦好・池田佳子・秦かおり(編) 『コミュニケーションを枠づける-参与・関与の不均衡と多様性』 pp. 1-23, くろしお出版.
- 厚生労働省(2015).女性の職業生活における活躍の促進に関する法律の概要 <http://www.mhlw>.

<sup>7</sup>2016年現在、76(11)と過去最高確率

- Go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000\_Koyoukintoujidoukateikyoku/0000095826.pdf/ (2016年6月10日最終閲覧)
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局職業家庭両立課 (2015) 「仕事と家庭の両立支援対策について」  
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kurashinoshitsu/bunkakai2/dai3/siryou1-2.pdf/> (2017年4月10日最終閲覧)
- 槇村久子(2002). *A Study on Women & Development in Mongolia with the Economies in Transition*, 京都女子大学現代社会研究, 97-113.
- メイナード・泉子・K(1997). 『談話分析の可能性：理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版.
- McNeill, David(1992). *Hand and Mind: What Gestures Reveal about Thought*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Schegloff, Emanuel A(1998). Body torque. *Social Research*(65), pp.535-596.
- Tannen, Deborah (2007). *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. 2nd edition. New York : Cambridge University Press.
- 内田安伊子(2002). 「～だろう」による確認に対する応答) 講座日本語教育 38号 53-72, 早稲田大学日本語研究教育センター.
- Wertsch, James V(1991). The Multivoicedness of Meaning. In *Voices of mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge University Press, pp.67-93.
- 「世界史のはじまり モンゴルを学ぼう：第10回 モンゴルはウーマノミクス女性が活躍する社会のお手本. <https://www.youtube.com/watch?v=EVRWn1hKs34&list=PLgfGL0C EXzjCABdxFSgFEB8UUcPcBuHv&index=11> (2016年6月10日最終閲覧)
- 「チャンネルクララ」 <http://www.chclara.com/about.php/>
- 「Inter-Parliamentary Union」 <http://www.ipu.orG/wmn-e/classif.htm>

#### トランスクリプト記号

- |     |         |   |             |
|-----|---------|---|-------------|
| (.) | マイクロポーズ | [ | オーバーラップの開始部 |
| —   | 分析上の焦点  | @ | 笑い          |
| :   | 引き伸ばし   |   |             |